



チリ拠点を訪れて

ニュースレター28号の巻頭文を書かせていただくのは、本学消化管外科の安野正道(准教授、本学1987卒)でございます。

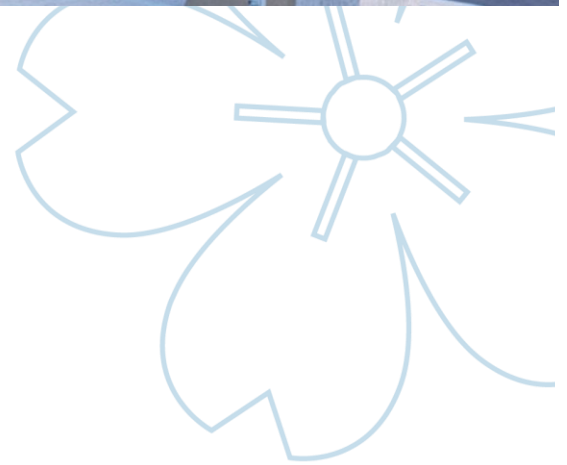
クリニカ・ラス・コンデス(以下CLC)内にあるラテンアメリカ共同研究拠点(以下LACRC)は、チリの大腸癌診断・治療の標準化に成果をあげています。チリ国内にとどまらず、エクアドルなどに活動を拡げ、プロジェクトセメスター学生のチリ大学やCLCでの研究も支援してきました。

このように存在感を増しているLACRCの活動を外科領域にも拡大できないかと、ラテン気質?外科医の筆者が、11月14日から12月4日までチリ・サンティアゴ市に派遣されました。パチレ大統領任期満了総選挙に伴う公立病院のストライキなどのアクシデントに見舞われたものの、LACRCの小田柿智之助教、早川美貴さん、Margarita Barjaさん両補佐員のご尽力で、CLCだけでなく、国立サン・ボルハ病院、チリ大学附属病院、国立マイブ病院で、カンファレンスや病棟回診、手術に参加し、レジデントやフェローを含む多くの外科医たちと公私にわたる楽しい交流ができました。

CLCでは、カンサーボードにおける私の提案が採択され、直腸癌手術後の骨盤内再発例に手術指導して、チリ初の骨盤側方リンパ節郭清術(内腸骨血管管合併切除)を成功させることができました。

CLCの位置するラス・コンデス地区は近代的な建物と緑が共存して美しい新市街地で、郊外のワイナリーも素晴らしく、一度サンティアゴを訪れてみられることをお勧めします。

消化管外科学分野 安野正道 准教授



LACRC TMDU IN CHILE
Latin American Collaborative Research Center
Santiago de Chile



骨盤側方リンパ節郭清成功。術者ロペス医師(左)、筆者(右)



ワイナリー-Viña Casas del Bosque (<https://www.casasdelbosque.cl/>)
カストロ医師(左)、サラテ医師(中央)、筆者(右)

Contents

ご挨拶	1
ベルナルド・オヒギンス勲章	2
JDプログラム	3
PRENECの進捗状況	4
プロジェクトセメスター	5
活動報告	6

ベルナルド・オヒギンス勲章

大山前学長ベルナルド・オヒギンス勲章を叙勲

これまでの40年にわたるチリでの本学の取り組みに対して同国政府から高い評価を受け、12月5日に駐日チリ共和国大使公邸にて大山喬史前学長がBernardo O'Higgins (ベルナルド・オヒギンス) 勲章を叙勲されました。

この勲章はチリの政治、経済、医療、教育、文化関係への貢献のあった外国人に対し、チリ大統領から授与される最高位のものであります。

式典には、田中雄二郎氏(本学理事)、フランシスコ・ロペス氏(PRENECプロジェクトのチリ側の責任者・本学客員教授)、河野辰幸氏(本学前副理事・前LACRC拠点長)、椿昌裕氏(元LACRC特任教授)、河内洋氏(元LACRC講師)、岡田卓也氏(本学講師)、小林真季氏(元LACRC研究員・特任助教)、松宮由利子氏(本学・チリ大学ジョイント・ディグリー・プログラム大学院生)、延原都香氏(本学事務長)、田中雅彦氏(本学次長)、ソニア・レオン・カマラ氏(本学係員)参列のもと、ディアス臨時代理大使より伝達されました。



ベルナルド・オヒギンス勲章



ディアス臨時代理大使と大山前学長



式典出席者と記念撮影

ジョイント・ディグリー・プログラム

11月にチリ大学及びCLCの医師3名が来学し、今後のジョイント・ディグリー・プログラム(以下JDP)の運営について情報交換を行いました。また今年度も本学とチリ大学の合同教職員FD研修を実施し、最新の医療制度、最先端医療・研究を互いに理解しあう貴重な機会となりました。本号では訪問時の様子をお伝えいたします。

11月のチリ大学教員による本学訪問及び Joint Workshop 2017@TMDU

11月28日・29日にチリ大学のオライアン教授、ウリベ教授、トレス准教授が来日し、医学部附属病院の見学、本学学長訪問、JDP会議、JDP学生への指導、また教職員FD研修「Joint Workshop 2017@TMDU」を行いました。本研修は昨年同様両大学の教員の能力向上と意識を共有するために実施し、チリに関係する教員や学生を含め、2日間で約65名の参加者が出席しました。



「Joint Workshop 2017@TMDU」の様子



学生指導の様子



左よりトレス准教授、北川医学部長、吉澤学長、オライアン教授、ウリベ教授、小嶋教授

PRENECの進捗状況

大腸癌早期診断プロジェクト(PRENEC)の最新情報をご報告いたします。現在、バルパライソにおけるPRENECが、病院の予算確保の問題で低迷しているものの、プンタ・アレナス、サンティアゴ、バルディビア、オソルノ、コキンボの5都市、及び国外ではパラグアイでのパイロットプログラムが順調に進行しています。

ロペス医師、本学にてPRENECの進捗報告

12月5日のベルナルド・オヒギンス勲章の叙勲式典の為にチリから駆けつけたロペス医師は、翌日、本学にて行われたPRENEC会議に参加し、本学の田中雄二郎理事、植竹宏之教授、安野正道准教授へPRENECの進捗状況を報告しました。

チリ国内外でのPRENECの拡がりや今後の展開について協議されました。



PRENEC会議の様子

カラマ市における講習会



チュキカマタ銅山

チリ北部に位置するカラマ市は標高2700mの街で、世界最大の露天掘りの銅山であるチュキカマタ銅山のベッドタウンです。

この都市で、12月21・22日の2日にわたり、チリ北部のカラマ市のカラマ病院にて、CLCのロペス医師、ペニャローサ医師、ポンセ看護師がPRENECに関する発表を行いました。

この会をとおして、今後カラマでもPRENECが展開されることが期待されます。

プロジェクトセメスター

本学医学科4年次の学生を対象とした学生海外基礎医学実習(プロジェクトセメスター)で、6月よりチリ大学に派遣されていた2名の学生は、11月をもってチリにおける課程を終えました。帰国前の最終発表会では、チリの担当教官及び研究室スタッフを前に堂々と研究成果を発表し、各担当教官より高い評価を受けました。南米という異文化で得た様々な体験を通して、将来、海外でも活躍できる医師へと成長することが期待されます。

最終発表会を終えて

小島原知大 チリ大学 腎臓病学研究室所属

11月までチリ大学医学部に派遣されていました、医学科4年の小島原知大です。チリに来たことがつい昨日のことに思われます。

研究実習では「南米は資金力では世界に勝てないから、アイデアで勝負するんだ」という言葉が印象に残っていて、私もそのアイデアを生む過程に何回も参加し、手技だけでなくサイエンスの考え方の面も成長させることが出来ました。また、サイエンスの共通言語である英語で研究実習を行えたことは、この先のキャリアを考える上で大変参考になりました。

このような貴重な機会をくださった北川医学部長をはじめとした医科歯科の先生方、現地での生活を全面的にサポートしていただいたLACRCスタッフの皆さん、研究の面で多くの刺激を与えてくださったチリ大学の先生方への感謝を常に忘れず、歴代派遣の先輩方のように後輩たちを支援する立場に回り、医科歯科とチリとの関係がより良いものとなるように尽力したいと思っています。



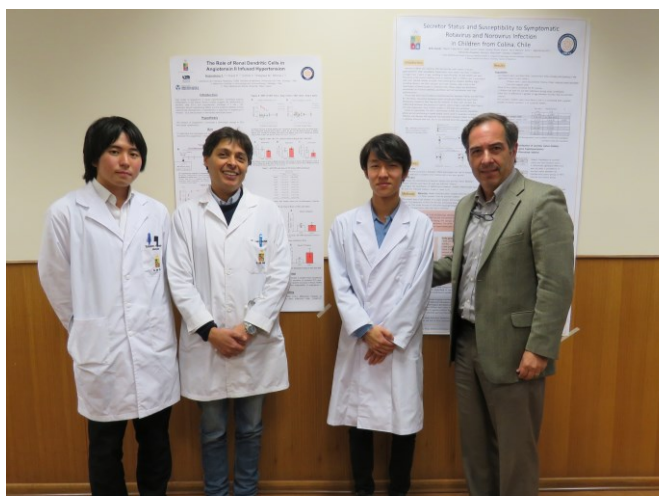
最終発表会の様子

鈴木圭人 チリ大学 感染症学研究室所属

チリの生活があっという間に過ぎてしまいました。この半年間の生活は本当に充実していました。

研究面では、ELISやqPCRなど実際のラボの作業だけでなく、インフォームドコンセントの承認を頂くために倫理審査委員会に足を運び、自分が書いたプロトコルを提出するという経験までさせていただきました。未熟なスペイン語を使いながら委員長、副委員長そして秘書の方の前で研究について説明させていただいたことは非常に良い経験になりました。また、サンティアゴの外にあるコリーナという町では、実際に自分の研究で使わせて頂く唾液サンプルの収集キットを各ご家庭に配布するというお仕事にも参加させて頂きました。最後まで温かく見守ってくださったオライアン先生をはじめ、研究室のみなさまのサポートのおかげで、「医学研究とはどのようなものか」ということを多角的な視点で学ぶことができました。

TMDU、チリ大学の皆様のサポートのおかげで、最後まで充実した時間を過ごすことができました。この半年間の生活は一生の財産になる、と今から確信しています。本当にありがとうございました。



お世話になったチリ担当教官と記念撮影

LACRC活動報告

ウルグアイ出張

10月21日から27日までClínica de Gastroenterologíaの要請を受けて、LACRCの小田柿助教が、内視鏡治療の指導及び講演目的にてウルグアイの首都、モンテビデオを訪れました。滞在期間中、同院内の医師やレジデントを対象に内視鏡診断・治療の指導にあたり、講演会では、「本学が関与したチリ及びラテンアメリカでの大腸がん検診プロジェクト」及び「大腸EMRの際の基本事項」に関する発表を行いました。

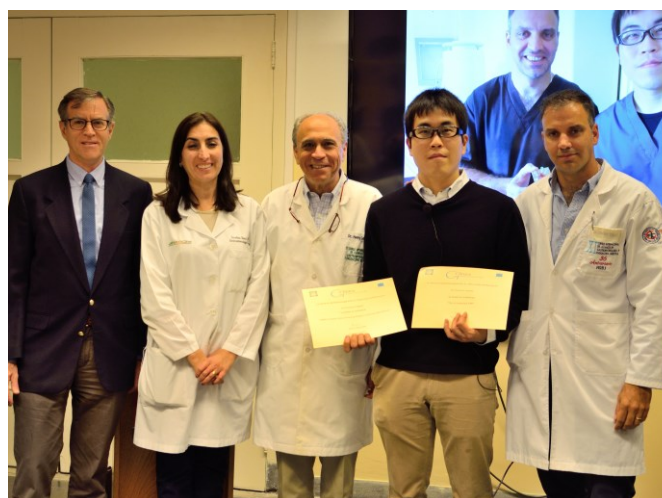
今後もこのような機会を通して中南米の医療の向上に貢献してまいります。



発表の様子



内視鏡技術指導の様子



病院関係者との記念撮影



病院レジデントへレクチャーを行っている様子

安野准教授によるチリ視察

本ニュースレターの巻頭言でお伝えしましたように、本学の安野准教授が、11月14日から約3週間、外科分野での技術協力の可能性を調査する目的でチリを訪問しました。滞在中は、CLC、国立サン・ボルハ病院、チリ大学附属病院、国立マイプ病院における外科的なアクティビティに加えて、チリの大腸肛門外科医等を対象とした直腸がんシンポジウムでの演者及びパネリストを務め、聴衆からは多くの関心が寄せられました。

その他、JDPIに関連した用務として、チリ大学訪問の際にオライアン教授と今後のJDPIの課題について協議をしました。また、フィニス・テラエ大学で医学部生対象に行った特別講演会では、日本の外科診療、医学教育制度及びJDPIに関して紹介しました。

また、12月1日には、日本チリ修好120周年の記念行事として開催されたJICAボランティア派遣20周年記念式典にLACRCスタッフとともに出席しました。

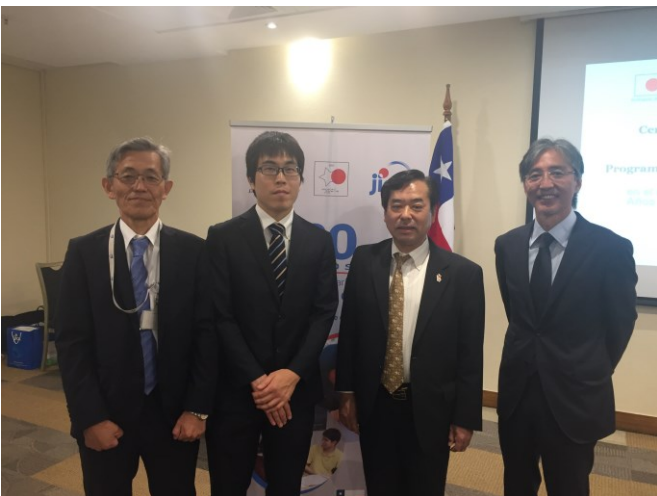
今回の視察により外科分野の技術協力の展開が期待されます。



シンポジウムでの発表の様子



オライアン教授との会談



JICAボランティア派遣20周年記念式典での記念撮影
左より桜井JICAチリ支所長、小田柿助教、平石在チリ日本大使、安野准教授



特別講演会が行われたフィニス・テラエ大学

LACRCへの来訪者



五十川医師(右から2番目)とLACRCスタッフ

学会等で来智した方々をLACRCにお迎えし、我々の活動等を紹介することがあります。

10月4日～7日にサンティアゴで開催された国際小児歯科学会へ参加するために来智された国立成育医療研究センター病院小児歯科の五十川伸崇医師が、10月6日にLACRCを訪れました。LACRCオフィスを紹介し、我々の活動の説明をした後、CLC歯科部門の見学もしていただきました。

また、サンフランシスコに留学している本学消化器内科の清水寛路医師が12月に来智した際に、同期の小田柿助教が、LACRCオフィス及びサン・ボルハ病院を案内しました。サン・ボルハ病院では小田柿助教の内視鏡指導の様子なども見学していただきました。

サンティアゴに訪問する予定があり、我々の活動に興味のある方は是非ご連絡ください。



清水医師(左)とLACRCオフィスの前で



サン・ボルハ病院日智消化器病研究所前にて

編集後記

今年も残すところ僅かとなりました。振り返ると、JDP及びPRENECの拡大、チリプロジェクトセメスターの再開、また秋篠宮殿下・妃殿下のチリご訪問、大山前学長のベルナルド・オヒギンス勲章の叙勲、と例年に比べて印象深く、充実した年となりました。私個人としては、LACRCでの業務を通して多くの素晴らしい方々に出会う機会をいただくことが出来ました。

また、CLCでは、本学とチリ間のプロジェクトにご支援をいただいていたマニヤリッチ元保健大臣が今年11月にCLCのCEOに就任し、ロペス医師が2017年の院内最優秀医師賞を受賞しました。これらが追い風となって来年はさらなるプロジェクトの飛躍が期待されます。

皆様が良い年を迎えられますようお祈り申し上げます。(早川美貴)

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点
Latin American Collaborative Research Center
Newsletter No.28, December 2017

[発行日] 2017年12月31日

[制作] Latin American Collaborative Research Center
Tokyo Medical & Dental University
Clínica Las Condes
Lo Fontecilla 441, Las Condes, Santiago, Chile
Tel: (56-2) 2610 3780
Email: LACRC-CHILE.adm@cmn.tmd.ac.jp